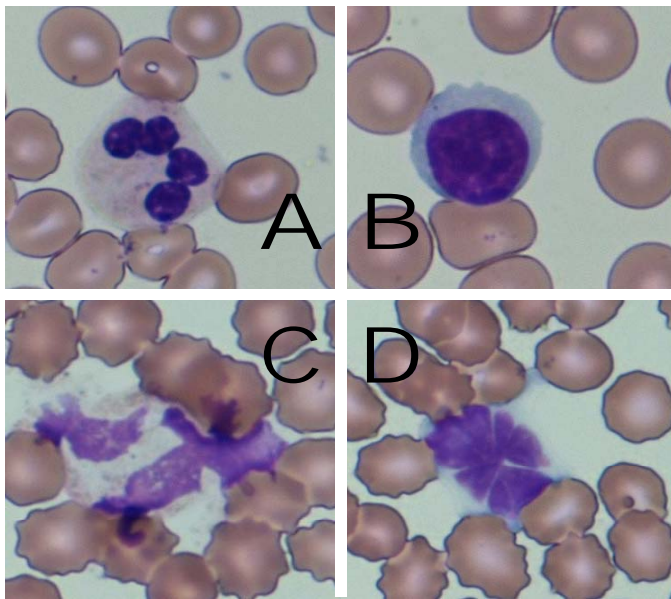


## 形態学から見た血液像の経時的変化

血液検査に影響を与える主な要因として血小板凝集や赤血球凝集などがありますが、いずれも血球が凝集することにより、血算値が偽低値を示します。また白血球分類（血液像）においては採血後の時間経過が細胞の形態変化に大きな影響を与えます。

今回は血液像の経時的変化について簡単に説明したいと思います。

血液検査部門では、多項目自動血球分析装置XE-2100を用いて血算5種、血液像、網状赤血球を測定しています。その際、異常と判定された検体についてはSP-100で血液塗抹標本を作製した後、目視にて確認を行っています。通常、血液像は即日検査が基本ですが、当施設の場合、検体が採取された翌日、検査室に届くということがしばしば起こります。



では採血直後と採血後24時間経過した検体とでは血液像にどのような違いが見られるのか顕微鏡写真で比較してみましょう。採血直後の血液像は、核のクロマチン構造や輪郭、細胞質の辺縁が鮮明です（写真A・B）。一方、採血後室温に24時間放置した検体では、核のクロマチン染色性の均一化や膨化、クローバー状の変性などが認められます。また、細胞周縁の不整化も見られます（写真C・D）。

このように血液細胞は時間の経過とともに形態変化が進むため、判定が困難になってきます。

このような理由から血液像は即日検査が望ましいのですが、必ずしも当日に検査できない場合が生じてしまいます。やむなく翌日以降に検査を行う場合には、検体を冷蔵保存します。冷蔵保存することにより形態変化の進行が遅くなるため、室温保存に比べ、比較的安定した検査結果が得られます。